

保護者からみた保育者との誤解体験

張 貞京、真下 知子

本研究は保育者と保護者間で発生した誤解事例のプロセスと要因に着目し、その対応策を探ることを目的としている。今回は保護者を対象に調査を行い、保護者の視点からも、保育者とのコミュニケーション上のずれが日常的に発生している事が示唆された。子どもの出生順による誤解発生数は、誤解された体験と誤解した体験のどちらも一番目の子どもの時が最も多く、初めての子育てに奮闘している保護者と保育者との間にある認識の相違が誤解発生の一因であると考えられた。

キーワード：保護者、保育者、誤解、コミュニケーション

I 問題と目的

1 保護者支援に関わる問題

保護者支援が保育者の職務の一つとして明確に示されるようになったのは、2008年に改訂された保育所保育指針の中に、「保護者に対する支援」が新設されてからである。子どもや家庭を取り巻く環境の変化や保護者の就労状況などの多様化が近年進んだことにより、「保育士の専門性を生かした保護者支援」が求められるようになったのである¹⁾。

入所している子どもの保護者への支援として、保育所の機能、特性を活用した保護者支援を行うことが求められている。保育所保育指針の解説書において、保育所の機能、特性とは、①日々、子どもが通い、継続的に子どもの発達援助を行うことができること、②送迎時を中心として、日々保護者と接触があること、③保育所保育の専門職である保育士をはじめとして各種専門職が配置されていること、④災害時なども含め、子どもの生命・生活を守り、保護者の就労と自己実現を支える社会的使命を有していること、⑤公的施設として、様々な社会資源との連携や協力が可能であること、の5点から、共

働き家庭の増加や家庭の養育力の低下などの今日の状況を踏まえた支援が必要とされている²⁾。保育者は子どもの発達を促す役割だけでなく、日々保護者と関わる存在として、専門性をもって保護者の子育て力を高める役割が求められているのである。そのために、日々の関わりにおいて、保護者と良好な関係を築き、適切にコミュニケーションを取ることが必要であることはいうまでもない。

ところが、保育所の置かれた現状は厳しく、保育士不足が深刻化している。その解決策の一つとして取り組まれた保育士資格を有しながら常勤職に就いていない潜在保育士に関する調査では、保育所が潜在保育士を受け入れる際、受けさせたい研修内容として「保護者支援」に関するものが64.8%と最も多かった。保護者支援に苦心する保育所の現状がうかがえる結果であり、保護者支援を適切に進める方法や内容が求められているのである^{3) 4)}。

2 保護者支援に関する先行研究

保護者と保育者の関係をテーマにした研究は、2000年代後半ころから急激に増加している。

神谷によれば、中でも保護者対応に関する研究が特に増えたとされる⁵⁾。これらの研究は、保護者と関わった際に保育者が感じる困難に焦点を当てたものが多い。保育者の保育経験年数との関連を調査した研究が多数あり、保護者との関わりについて、若手保育者が抱く困難や経験年数による違いに着目している研究もみられる^{6) 7) 8)}。

また、保護者との関わりにおいて保育者が困難を感じる例として、子どもの行動や発達に気になる点がある場合、保護者との共通認識をもち、子どもの健やかな発達を目的とする改善策に取り組むことが大変困難であるとする報告が多数みられる^{9) 10) 11)}。森田らは、子どもの社会性の発達に関する評価に焦点を当て行った研究の中で、保護者が集団生活での子どもの姿を見る機会がないため、保育者と同じ評価をすることは難しいとしている¹²⁾。保育者が子どもの利益を優先すればするほど、保護者との関係の形成維持に困難が発生していると考えられる。これらは、子どもの行動や発達に関する知識と理解において、保護者と保育者が共通認識をもつことが困難であることを示している。筆者が発達上の課題のある子どもの保護者と保育者間に発生した誤解事例を分析した研究では、発達理解や育てほしい姿に関する相互の認識のずれが背景にあり、共通認識を持つことが困難であった¹³⁾。

子どもの行動や発達を客観的に認識し判断するには、保護者と保育者間の経験と環境の違いが背景にあり、ずれが発生していると考えられる。その違いを踏まえつつ、共通認識を形成していくには、日々の関わりの中で、経験と環境の差を意識したコミュニケーションが求められるのである。保護者がどのように子どもの行動や発達を理解し、どのように保育内容を捉えて

いるのか、何を求めているのか、保護者の認識を明らかにしていく必要がある。保護者を対象に行われた研究は少ないが、保育者の認識との比較を行ったものもみられ、保護者のニーズに関する研究が複数みられる^{14) 15) 16)}。これらの研究から、保護者がわが子の生活する園を選ぶ際、保育内容に関心を持ち、よりよい発達を願っていることが分かる。保育者の働きかけ方次第で、保護者との共通認識を持つことが可能であるといえるが、保護者が日々の関わりの中で、保育者に対してどのような思いを抱いているのかを調査したものは見当たらない。保育者との関わりについて、実際の場面でどのような問題が発生し、保護者がどのように受け止めているのかを明らかにしていく必要がある。

3 保護者と保育者のコミュニケーションにおける誤解

保育者が保護者と関わっていく中で、適切に支援をしていくには、トラブルが発生してからではなく、日々の接触から経験と環境の違いを意識して取り組まなければならない。日常的なコミュニケーションから、正確かつ適切なコミュニケーション関係を形成維持していく必要がある。

コミュニケーション関係を適切に形成維持する方法として提案されているものが、三宮によって行われた具体例から学習し解決策を探るよう提案する研究である。三宮は青年期の誤解によるトラブル事例の収集と学習法を提案しており、人が同じような誤解経験を繰り返していると考えられ、失敗例から学び、その解決策を目指す教育が必要だと勧めている^{17) 18)}。

誤解体験から学習を行い、誤解発生を防ぐことができれば、日々保護者と関わっている保育者にとって、安定したコミュニケーション関係

を形成することができると期待できる。誤解発生によるトラブルの予防だけでなく、適切なコミュニケーション関係の形成維持により、保護者への適切な支援につながるのである。

以上より、本研究では誤解に焦点を当てていくが、誤解の意味は範囲が広い。英和辞典によれば、ミスコミュニケーション（miscommunication）が「誤った伝達（連絡）、伝達（連絡）不良」を意味しているのに対して、誤解（misunderstanding）は「誤解、解釈違い、不和、意見の相違、いさかい」を意味している¹⁹⁾。保護者と保育者間で発生した誤解事例に、大小の区別はない。日々、接触している関係であるため、小さいと思われていた出来事が深刻なトラブルに発展することもある。そのため、本研究における「誤解」は、誤った伝達から悪化した関係性までの広い範囲と定義する。

4 研究の経緯

筆者らは、保育者と保護者間において発生した誤解事例のプロセスと要因に着目し、その対応策を探ると共に、保育者と保護者の良好な関係構築と維持をめざした保育者支援のリカレント教育的活動を同時進行させることを目的として研究を進めてきた。保育者を対象に行った誤解体験に関する研究では、誤解発生の原因として、時間的なずれ、伝達表現の問題、連絡帳や電話などのコミュニケーション媒体、認識のずれ、集団の人数や送迎時などの場面、対応・確認不足の6つのカテゴリーが得られた。保育者が保護者と関わる際、様々な手立てを考え、準備していたにも関わらず誤解を招いた例も見られ、保護者に誤解されたことが、辛い経験として長く保育者の記憶に残っていることが少なくなかった。しかし、誤解されたネガティブな経験から、保育者は日頃の保護者とのコミュニ

ケーションの大切さを再認識し、保護者の理解、子どもの姿の共有のため、様々な工夫をしていることがうかがえ、保育者にとって貴重な学びとなっていることが示唆された^{20) 21)}。

Ⅱ 研究の対象および方法

1 研究の目的

今回は、保護者を対象に保育者との誤解体験について調査を行い、誤解が発生する要因を保護者の視点から明らかにすることを目的とする。

2 調査対象者および手続き

京都府下の保育所に調査協力の依頼を行い、8ヵ園の協力を得ることが出来た。在園児の保護者へのアンケート調査紙の配布を施設長に依頼し、795世帯が対象となった。

アンケートの回収方法は、返信用封筒を同封し、無記名の状態で本調査責任者宛てに投函できるようにした。2015年10月に各施設に郵送し、回収期間は2015年11月～2016年1月までとした。

3 質問紙の構成

フェイスシートは、回答者の年齢、性別、子ども全員の在園年数について尋ねた。

アンケート項目は、

- ①保育者の言った（書いた）事を誤解したことがあるか、
- ②それはどのような状況で発生したのか、
- ③体験は何番目のお子さん、何歳児クラスでの事か、
- ④その体験が生活に与えた影響、
- ⑤保育者に誤解されたことがあるか、
- ⑥どのような状況で発生したのか、
- ⑦何番目のお子さん、何歳児クラスでの事か、

⑧その体験が生活に与えた影響、について尋ねた。

4 分析の手続き

回答者の年齢、性別、①「保育者の言った（書いた）事を誤解したことがあるか」、⑤「保育者に誤解されたことがあるか」に関する回答の傾向を示した。今回は、③⑦の誤解した・誤解された「体験は何番目のお子さん、何歳児クラスでの事か」について分析を行った。誤解事例の記述内容については、得られた回答数が少ないため、カテゴリーに分類せず、特徴的な数例を示すことに止める。

なお、回答に登場する個人の個人情報と守秘義務に関して十分に配慮し、個人・園名・地域が特定されるものについては回答文脈に影響しない範囲で改変し記載した。

Ⅲ 結果および考察

1 回答者の構成比

2015年1月末までに回収できたのは310件であった。配付数795件に対する回収率は38.9%であった。

回答者の年齢別構成を表1に示す。20代が20名（6.5%）、30代が201名（64.8%）、40代が86名（27.7%）、50代が1名（0.3%）で、30代が最も多かった。子育てをしている保護者が30代に最も集中しており、続いて多いのが40代であった。

表1 回答者の年齢別構成

20代	30代	40代	50代	無回答	合計
20	201	86	1	2	310
6.5%	64.8%	27.7%	0.3%	0.6%	100%

表2は回答者の性別比である。女性が283名（91.3%）、男性が11名（3.5%）とあり、9割以

上が母親による回答であった。

表2 回答者の性別構成

女	男	無回答	合計
283	11	16	310
91.3%	3.5%	5.2%	100%

2 誤解体験の有無

誤解体験の有無を示したものが表3である。保育者に誤解された経験ありと答えた保護者が27名（8.7%）、経験なしが279名（90.0%）であった。保育者を誤解した経験があると回答した保護者が26名（8.4%）、経験なしが276名（89.0%）であった。誤解した体験と誤解された体験のいずれも、体験ありと回答した保護者は全体の1割に満たなかった。

表3 誤解体験の有無

誤解された		誤解した	
体験あり	体験なし	体験あり	体験なし
27	279	26	276
8.7%	90.0%	8.4%	89.0%

3 誤解体験の記述数

続いて、記述内容数を表4に示す。内容別にみると、保育者に誤解された体験が12事例、その体験が生活に与えた影響に関する記述が12事例、誤解した体験が45事例、その体験が生活に与えた影響に関する記述が48事例であった。保護者が保育者に誤解された体験より、保護者が保育者を誤解した体験の方が多かった。

誤解体験の有無と事例記述数の関連については、保育者を誤解した体験がないと回答していたのが26名であったにも関わらず、誤解体験の記述が45例あった。誤解された体験についても、体験なしと回答しているにも関わらず、事例を

記述した回答者がいる。体験の有無数と事例記述数については、後ほど総合考察において考察を加える。

表4 事例の記述数

誤解された体験		誤解した体験	
体験の記述	体験の影響	体験の記述	体験の影響
12	12	45	48

4 誤解が発生した時の出生順による傾向

次に、誤解が発生した時に在園していた子どもの出生順を示したのが表5である。一人目の子どもの時が最も多く、保育者に誤解されたと回答したのが23名、保育者を誤解したが22名であった。続いて、2人目の子どもの時に誤解されたが7名、誤解したが8名であった。三人目以降の子どもでは、誤解されたが2名、誤解したが1名であった。この結果から、保育者との関係において、一人目の子どもの時に誤解が最も発生しやすいと考えられた。

5 誤解体験の記述例—誤解された体験

誤解体験の記述例を数例みていこう。まずは、保護者が保育者から誤解された事例を表6に示

す。事例1は、保護者が伝えなかったことが的確に伝えられず、保護者の意図とは違う意味で伝わった体験であることが分かる。苦情を言ったつもりではなかったにも関わらず、クレーマーだと思われると感じていたのである。保護者が保育者と適切にコミュニケーションを取りたいと願っていたとしても、伝えるタイミングや伝達する第三者が介されることで伝達意図がゆがんでしまう可能性を物語っている。

事例2も、連絡帳に記述した意図とは異なる意味で受け取られていたことが分かる。正確に伝わっていなかったことに気づき、自分の書いた連絡帳の文面を読み直したことで、意図が伝わっていなかったことに気づく保護者の体験である。

6 誤解体験の記述例—誤解した体験

保護者が保育者を誤解した事例の一部を示したのが表7である。事例3には、後になってから保育者の励ましであったことに気づくが、言われた当時は大変腹立たしく受け止められていたことが記述されている。

事例4に記述された保育者の意図が全く違う意味で保護者に伝わっていることが分かる。保

表5 誤解体験が発生した時の子どもの出生順

誤解された体験発生時				誤解した体験発生時			
一人目	二人目	三人目	四人目	一人目	二人目	三人目	四人目
23	7	1	1	21	8	1	0

(延べ人数)

表6 保護者が誤解された体験例

事例1	近隣で起きたことを園長先生に相談したかったが不在だったため、副園長先生に伝えた。副園長から園長に伝えてもらったが、真意が伝わらず、ただ相談したかっただけに、クレーマーだと思われたようで、園長の態度がその時だけ冷たかった。最初から園長に相談したらよかった。
事例2	参観の申し込みの際、「参観後子どもは預ける」で申し込み、当日連絡帳で「参観後（親は）失礼するので（子どもを）お願いします」（カッコ内は未記入）と書いたところ子どもも帰る方へ分類されていた。後から考えたら「子どもも帰る」の意味にもとれると気が付いた。

表7 保護者が誤解した体験例

事例3	園に入りたてで、ならし保育時に体調不良（ゲリ…）で呼び出しを受けてお迎えへ。「こんなこと、何回でもあるわな。」と保育者から言われ…これが0歳児では当たり前のかもしれない。しかし、わが子の体調が悪いのにそんな言葉はないだろう！と思った。このような大変さも乗りこえなきゃって意味の保育者からの声だったのかもしれないが、その時は受け入れられなかった。
事例4	お迎えの時、保育者より「〇〇ちゃん（息子）、かわいくて、園のアイドルなんですよー」と言われました。特別かわいがったり、（特別あつかい？）あるのかなー？と不思議に思いました。
事例5	園から直接保護者への説明はなく、子どもたちを通して、伝達することがあります。「シャツを着てきてはいけない」「長ズボンはだめ」と子どもたちは、親に伝えます。「～だから、できるだけ半ズボンをはこう！」と言った先生たちの言葉も、きちんと、正確には保護者には伝わらず、保護者間でもとても混乱をまねきました。
事例6	ささいな事ですが、配布されたプリントの内容を誤解したことがあった。クラスが動物の名前で表現されているが、プリントには年代別（例：1歳児クラス）等書かれていて、子どもが何歳児クラスに属しているのか入所当初分からにくかったことがあった。 誤解の内容→必要だと思って準備した物（水筒。わざわざ買って）が、違う年代のクラスの事だったので、不要な事が判明した。

育者の言った誉め言葉が、保護者には不安材料になっていたともいえる。事例5は、保護者に直接伝えず、子どもを媒介として伝達したために発生した誤解である。同じ経験をしておらず、置かれている環境も異なる保護者に、伝達された事項の背景や理由を理解してもらうことは容易ではない。さらに、子どもが伝達役となった際、子どもの言語発達によって、保護者への伝達内容の正確さに違いが発生する。事例6は、何歳児クラスという年齢による区分が保育者の常識であって、保護者には理解されていないことであることが分かる。

IV 総合考察

1 保護者が保育者を誤解した体験

保護者の誤解体験は、保育者に誤解された事例の記述より、保育者を誤解した事例の記述が多かった。これは、対象保育者の約半数が保護者に誤解される体験をしていた筆者らの研究成果を支持するものであった²²⁾。保護者の視点からも、保育者とのコミュニケーション上のずれが日常的に発生しており、保護者が保育者を誤解する可能性が高いことが示唆された。保護者

と保育者に関する研究の中では、保育者が抱く困難が目立つが、保護者も保育者から伝達されたことや意図を正確に受け取ることができず、日々苦心していると考えられる。保育者を誤解した保護者の体験から、より正確に適切な伝達を可能にする配慮が保育者に求められているといえる。

2 誤解体験の有無数と記述数の違い

誤解体験があると回答した保護者数に比べ、誤解体験と判断される事例記述数が多かったのは、何を意味しているのだろうか。誤解は、ちょっとしたずれから深刻なトラブルに発展するまで、その範囲が広い。回答者である保護者にとって誤解として判断される体験はなかったため、体験なしと回答したもの、保育者とのコミュニケーション上のずれが発生した事例を書き込んだと推測される。保護者が保育者との関係において、コミュニケーション上のずれのようなものを日々体験していることがうかがえる。保護者が保育者を誤解した、保育者にされたと判断する体験は、深刻な事態に発展している可能性がある。保育者は日々の些細なずれが

生じやすいと認識したうえで、常に注意を払うとともに、状況を改善する取り組みが求められているといえる。

3 子どもの出生順による発生数の違い

子どもの出生順による誤解の発生数は、保育者に誤解された体験と保育者を誤解した体験のどちらも一番目の子どもの時が最も多く、初めての子育てに奮闘している保護者と専門職である保育者との間にある認識の相違が誤解発生の一因であると考えられる。

出生順による保護者の意識の違いについて、倉林らはメンタルヘルスの観点から若年層の母親を対象に調査を行っている。一人目の子どもの時が母親のうつ出現率が高く、子育てに関する不安が高いとされている²³⁾。他にも、子どもの歯並びに関する保護者の不安を調べた小野らによれば、一人目の子どもの時に保護者の不安が高く、二人目以降と比較して有意に高かった²⁴⁾。調べられた内容は異なるが、いずれも一人目を育てている保護者が不安を抱えながらも、初めての子育てに奮闘している姿を示している。

子どもの様々な育ちに関する知識を持ち得ていない保護者にとって、すべてが初めての体験であり、見通しの持ちにくい大変な毎日なのであろう。さらに、入所したばかりの保護者であれば、仕事に復帰したばかりであり、わが子を保育所に送迎するため、時間に追われる毎日を送っていることにもなる。保育者を誤解した、保育者に誤解された体験が一人目に最も多いのは、保護者支援の重要性をも物語っている。余裕のない日々を送る保護者は、具体的で分かりやすく、安心できる説明と受け止め方を保育者に求めているのではないだろうか。また、わが子との関係がサポートされているという実感が

重要であり、子どもの育ちに関する専門的な助言を適時に受けられるように、日常的な保育者の配慮が必要であろう。

4 保護者が体験した誤解発生の要因

筆者らが保育者を対象に行った調査において、保育者が保護者を誤解した事例から、時間的なずれ、伝達表現の問題、コミュニケーションの媒体、認識のずれ、集団の人数や送迎時などの場面、対応・確認不足の6つのカテゴリーに分類される要因によって誤解が発生する結果が得られている²⁵⁾。保護者を対象に行った今回の調査で得られた保護者が保育者に誤解された事例は、その結果を支持するものであった。保護者が誤解された事例1は、時間的なずれと副園長という伝達役のコミュニケーション媒体が要因となって誤解が発生していた。事例2は、連絡帳が媒体であり、伝達表現の問題による誤解の発生であった。筆者らが分類した誤解発生の要因を同様に当てはめることができ、保護者も同じ要因によってコミュニケーション上の困難を感じていると推測された。伝達の必要があった際、保育者の受け取りは正確であったか、保護者に確認する姿勢があれば、このような誤解発生を防ぐことができると考えられる。

次に、保護者が保育者を誤解した事例3は、伝達表現の問題があり、初めての子育てと保育所生活に慣れていない保護者が保育者の励ましを違う意味で受け取っている体験であった。経験豊かな保育者が、初めて子育てをしており、体調不良のわが子と付き合わなければならない保護者を励ましたとしても、伝達表現によっては励ましとして受け取られていないのである。ただし、励ましであったことに後から気づいていることから、どのような表現であったとしても、タイミングによっては肯定的に受け取られない

可能性を孕んでいることが分かる。暖かい励ましを適切に伝えるためには、保護者の置かれた状況への配慮、そして日々の変化に気づこうとする姿勢が求められるのである。

事例4も伝達表現の問題が要因である。わが子に対する保育者の誉め言葉であったにも関わらず、保護者の保育者に関する認識のずれととれる受け取り方の違いが読み取れる。保育者は保護者との関係を形成したい思いで、誉め言葉を誇張して表現していたのかも知れない。しかし、保護者はその誉め言葉から複数の子どもがいる集団生活を守る保育者の言葉として適切ではないと感じていたのである。わが子を特別扱いしているなら、大切にされていない子どもがいるのではと不安を抱いたと推測される。保育者は誉めたつもりでいるため、保護者の受け取りが違っていったことに気づいたのだろうか。誉めたことが違う受け取り方をされていたと知れば、何を話せばよいか心配にもなる。しかし、ここで留意すべき点は、誉める事が問題なのではなく、どのような言葉も相手に正確な意味で伝わっているかを確認しつつ、コミュニケーションを進める態度と意識なのである。

事例5は、子どもがコミュニケーション媒体となったために発生した誤解である。伝達事項が起こった状況を共有できていない保護者にとって、子どもからの伝達を正確に捉えることは困難であり、子どもの言語発達によっても伝達の正確さには違いが生じる。子どもが伝達できるようにし、親子関係を深める意図があると推測されるが、そのためには保護者に保育者の意図を正確に別途伝える必要があると考えられる。

事例6は認識のずれが要因である。何歳児クラスという表現は、保育所に関わったことのない保護者にとっては馴染みのないものであ

る。誕生日を基準に保護者が思う何歳児と、年度を基準に保育者が思う何歳児には、ずれが存在する。保育所内で飛び交う何歳児クラスの表現を保育者は保護者を対象に説明しているのだろうか。保育所での生活を送っていく中で、保護者もなんとなく理解していくのかも知れない。保護者支援を適切に行うためには、保育者の常識と保護者の常識が異なることを認識したうえで、保護者と日々関わっていかなければならない。

5 保護者と保育者の認識の相違

今回の調査では、深刻なトラブルに発展した誤解体験はなかったが、保護者が保育者との日々のコミュニケーションにおいて、困難を感じていることが分かった。その理由として、認識の相違が背景にあることは明らかである。保護者が体験した保育者との誤解発生の時期として一人目が多かったのは、子どもの行動や発達に関する知識もなく、慣れない生活を送る保護者にとって、保育所生活や保育者との関係は分からないことの連続なのかも知れない。保育所生活にも慣れておらず、子育てに精いっぱいの状態にあるためと考えられる。保護者にとって、初めての子育てと保育所生活には、たくさんの決まりや変化が待っている。保護者は仕事をしながら、慣れない毎日を慌ただしく送っているのである。保育者が保護者支援を行っていく際、保護者一人ひとりのおかれた状況を把握したうえで、安定した日々のコミュニケーションを行い、信頼できる関係を形成していく必要がある。

そのためには、子どもの行動や発達に関する認識のずれを補う日常の取り組みが求められる。保護者が我が子の変化、保育所の決まりや出来事に戸惑うことなく、安心して生活できるように、子どもの発達に関する知識を学ぶこと

が出来る機会や情報提供が望まれる。気になる点が発生してからではなく、我が子の発達や保育所生活に見通しをもって臨むことが出来るように支援が必要である。

また、何歳児クラスといった保育者の当たり前を見直し、保護者に適切に伝達できる表現、方法、タイミング、媒体の検討が求められるのである。保育者が保護者と適切にコミュニケーションを取り、適切に関係形成し保護者支援を行うためには、相互に認識の相違が存在することを踏まえなければならない。

今後に向けて

今回は、保護者を対象に保育者との関係において発生した誤解体験について検討を行った。保護者からの回収率が低く、体験の事例数が充分とは言えなかった。今後は、事例数を増やしたうえでの検討が必要であり、誤解範囲を明確に示した事例収集および分析を進める必要がある。また、保育者と保護者の認識の相違が誤解発生の要因となっていたことから、認識の相違を詳しく調査分析していく必要があると考える。

なお、本稿は2016年度日本発達心理学会第28回大会（広島大学）でのポスター発表に基づいたものである。

＜本研究は科学研究費（基盤研究C・課題番号26381112）の助成を受けて行ったものの一部である。＞

脚注および参考文献

- 1) 厚生労働省、保育所 保育指針解説書、フレーベル館、2008
- 2) 前掲1)
- 3) 厚生労働省、潜在保育士ガイドブックー保育士再就

- 職調査事業・保育園向け報告書ー、2011
- 4) 厚生労働省、潜在保育士の再就職支援に関する報告書、2011
- 5) 神谷哲司、保育園における「対応の難しい親」はなぜ産み出されたのか？ー家庭支援、保護者支援に関する研究動向からの一考察ー、Asian Journal of Human Services、Vol.3、pp.1-15、2012
- 6) 高橋真由美、保育所における保護者支援研究の現代的課題、藤女子大学 QOL 研究所紀要、Vol.10 (1)、pp.141-146、2015
- 7) 片山美香、若手保育者による保護者支援の困難さに対応に関する検討、岡山大学大学院教育学研究科研究集録、Vol.159、pp.11-20、2015
- 8) 中平絢子・馬場訓子・竹内敬子・高橋敏之、事例から見る望ましい保護者支援の在り方と保育士間の連携、岡山大学教師教育開発センター紀要、Vol.6、pp.21-30、2016
- 9) 久保山茂樹・齋藤由美子・西牧謙吾・當島茂登・井茂樹・滝川国芳、「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査ー幼稚園・保育所への機関支援で踏まえるべき視点の提言ー、国立特別支援教育総合研究所研究紀要、Vol.36、pp.55-75、2009
- 10) 森田愛子・藤井真衣、幼児の発達への保護者と保育者の気づき、広島大学心理学研究、Vol.12、pp.269-277、2012
- 11) 橋本逸子・木村留美子・津田朗子、保育所における「気になる子ども」の研究：保護者への対応について、金沢大学つるま保険学会誌、Vol.39 (1)、pp.101-108、2015
- 12) 前掲10)
- 13) 張貞京、障害児保育にかかわる保護者と保育者の誤解ー「気になる子ども」から障害を診断された子どもまでー、京都文教短期大学研究紀要、Vol.55、pp.71-82、2016
- 14) 住田正樹・山瀬範子・片桐真弓、保護者の保育ニーズに関する研究ー選択される幼児教育・保育ー、放送大学研究年報、Vol.30、pp.25-30、2013
- 15) 木山徹哉・菊池道興・森博文・片山順子・長谷川勝久・小方圭子、保護者の保育ニーズに関する実証的研究、九州女子大学紀要・人文・社会科学編、Vol.39 (1)、pp.17-30、2002
- 16) 丹羽さかの・酒井朗・藤江康彦、幼稚園、保育所、小学校教諭と保護者の意識調査：よりよい幼保小連携に向けて、お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要、Vol.2、pp.39-50、2004
- 17) 三宮真知子、人間関係の中の誤解ー言語表現の誤解

- に関する基礎調査ー、鳴門教育大学研究紀要、2、pp.31-45、1987
- 18) 三宮真知子、コミュニケーション教育のための基礎資料：トラブルに発展する誤解事例の探索的検討、日本教育工学会論文誌、32、pp.173-176、2008
- 19) リーダーズ英和辞典、研究社、1999
- 20) 張貞京・真下知子、保育者ー保護者間の誤解に関する基礎調査、京都文教短期大学研究紀要、Vol.53、pp.55-66、2015
- 21) 張貞京・真下知子、保護者ー保育者間のコミュニケーションにおける誤解事例の収集、京都文教短期大学研究紀要、Vol.54、pp.47-58、2015
- 22) 前掲 21)
- 23) 倉林しのぶ・太田晶子・松岡治子・常盤洋子・竹内一夫、乳幼児健診に来所した母親のメンタルヘルスに及ぼす因子の検討ー対象児の年齢との関連ー、日本女性心身医学雑誌、Vol.10 (3)、pp.181-186、2005
- 24) 小野俊朗・村田宜彦・青山哲也・坂井志穂・高田麻紀・吉田佳代・神谷省吾・土屋友幸、小児の歯並びに関する意識調査 第4報 出生順位による保護者の関心・不安度、小児歯科学雑誌、Vol. 44 (2)、pp.266、2006
- 25) 前掲 21)